平成22年度　男女共同参画推進講演会

「災害と女性 ～報道されなかった阪神・淡路大震災～」



日時　平成22年6月20日（日）　13:30～15:30
会場　こうち男女共同参画センター　3階大会議室

講師　正井礼子（NPO法人ウィメンズネット・こうべ代表）

1992年、市民グループ「ウィメンズネット・こうべ」発足、1994年、女性が本音で話せて元気になれる場として「女たちの家」を開設する。震災直後「女性支援ネットワーク」をたちあげ、自転車や洗濯機を集めて配布したり、「女性のための電話相談」を開設（1995年3月）、「女性支援連続セミナー」など被災女性の支援を行う。

震災後は、これまでの災害を女性の視点から検証し、予測される大災害に向けて「避難所に性別に配慮した設計」「女性に対する暴力の防止」など、女性の視点からの防災・復興に関する情報発信を全国各地で行っている。

●受賞歴

1998年　女性連帯基金より　第1回エンパワーメント奨励賞受賞　「女性と政治情報センター・関西」（女性を議会へ　バックアップスクール事務局）

2004年　国際ソロプチミストより　WHW（女性が女性を助ける賞）受賞

●出版物

「女たちが語る阪神淡路大震災」～いいたいことがいっぱいあった／ウィメンズネット・こうべ編集・発行　他

●○

★女たちで語ろう、阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災が発生した時、男性の間では誰が職場に一番乗りするのか競争になり、家族を顧みないで頑張ることが美徳となりました。一方で、家事や育児を担って職場に駆けつけられなかった女性は、責められたりクビになったりしました。男性たちは何時間もかけて職場に行き、また大企業はいち早く社宅やホテルを借り上げたため、夫たちは単身赴任となり、被災地には乳幼児を抱えた人や高齢者、仕事を持っていない女性たちが取り残されました。男

性たちの影で女性たちは孤軍奮闘していたのです。そういったことを震災2ヶ月後「女たちで語ろう、阪神・淡路大震災」という交流会で女性約 40 名と語り合いました。ある女性は、寒さと恐怖で震えていた地震2日後に夫が2カ月間出張に行ってしまい、見捨てられたという悲しさで涙がこぼれ、胃痛と不眠に悩まされたそうです。

★女性や子どもに対する暴力

震災直後に開設した「女性のための電話相談」に電話してきたある女性は「夫は家も取引先もつぶれてしまい機嫌が悪く、帰ってくるたびに子どもの前で私を殴ったり蹴ったり髪の毛をつかんで引きずり回したりする」と訴えました。そういった相談の電話が次から次へとかかってきました。そして彼女たちは電話の最後に「皆さんが被災して大変な時、こんな家庭内のつまらないことを相談する私はわがままでしょうか」と言うのです。当時私は「つまらないことでもわがままでもありません。福祉事務所に相談してください」と言うしかありませんでした。

また被災地での性暴力については「瓦礫の中に引きずり込まれてレイプされた」「お風呂ツアーと称してお風呂に入りたいと思っているボランティアの女性を集め、用意したワゴン車でレイプした」「避難所の体育館で、人々が出勤しひと気もまばらな日中、幼い子どもたちが性被害に遭った」「夜、眠っている子どもが体を触られた」等の様々な話を聞きました。過去大きな地震が発生した米カリフォルニア州のある市の報告書には「地震後①レイプが3倍増加②DV（配偶者からの暴力）による保護命令を求める人が 50％増加③児童虐待が増加」とあります。そして、大きな災害があれば女性や子どもに対する暴力が増加するということを予測し、そのための施策にきちんと取り組んでおくべきである、と結論づけています。

★女性のニーズは全く考えられていなかった

避難所のトイレは校庭の隅など遠く不便な場所に設置され、「プライバシーがない。手すりがなく段差がつらい。寒い。汚い。男女混合トイレで男性の視線が恐ろしかった」等の声がありました。トイレがそのような状態であったため、女性たちの多くはトイレを我慢するしかありませんでした。その結果、身体的・精神的に大きなダメージを受け、その後の生活に支障が出た人や亡くなられた方もいます。また、着替え室がないためバスタオルを巻いて避難所の中で着替えていたところ、それをジーッと見ている人がいて、いまだに裸になることが怖いというトラウマを抱えた女性たちが結構います。避難所には授乳するスペースもなかったので、お母さんたちは寒風の吹く中、避難所の外の隅で授乳していました。ある避難所では、生理用ナプキンが避難所の 1 番前に置かれました。しかし誰も取りに来ない。視察に来た女性議員の助言に従いトイレに置いたところ，すぐになくなったということがありました。避難所運営に女性のニーズは全く考慮されていなかったのです。

やはり避難所の運営に女性が参画していないと、女性が避難所生活の中で様々な不自由や問題を抱えても、それを口に出す事は難しいと思います。地域の女性が集まってワーキンググループを作り、「もし高知で南海地震が発生したとしたら、どんな困難を抱え、それにはどん

な対策が必要か。避難所はどんなことに配慮してほしいか。DV があればその相談窓口はどこになるのか」というようなことを細かく出し合い、ぜひ避難所マニュアルを作るときにそれらを盛り込んでもらいたいと思います。

★防災は日常から始まる

私は、日頃から例えば DV や性暴力の被害者への支援体制がなければ、災害時に女性の人権が守られることは難しいと思います。DV についてきちんと啓発されていれば、自分が暴力を受けていると自覚することができるし、加害者も自分の暴力に気がつく。性暴力についても、被害者がそのことをきちんと訴えることができる社会でなければ、災害時に被害に遭ったとしてもそれを語ることはなかなかできないだろうと思います。災害時にだけ福祉が充実するわけでも、災害時に突然女性が大事にされるわけでもありません。高知県や高知市、あなたの住んでいる地域の福祉や女性施策がどれだけ充実しているのか。そういったことを普段からどれだけ知っているかということが防災につながるということをぜひ知ってほしいと思います。